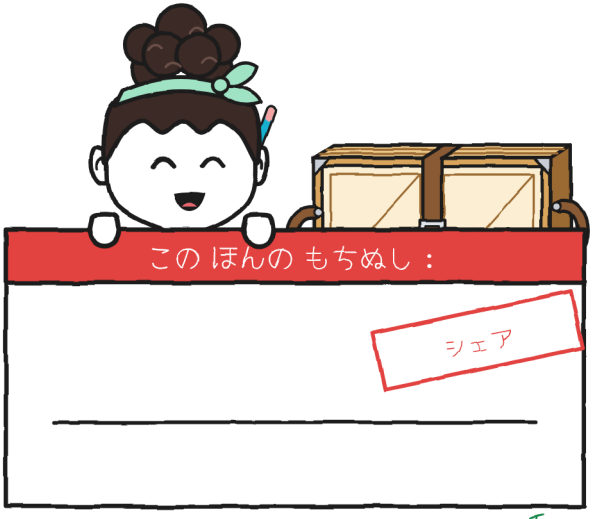


シェア。みんな はいる。 —J.

見つけたら、たたんで返してね。

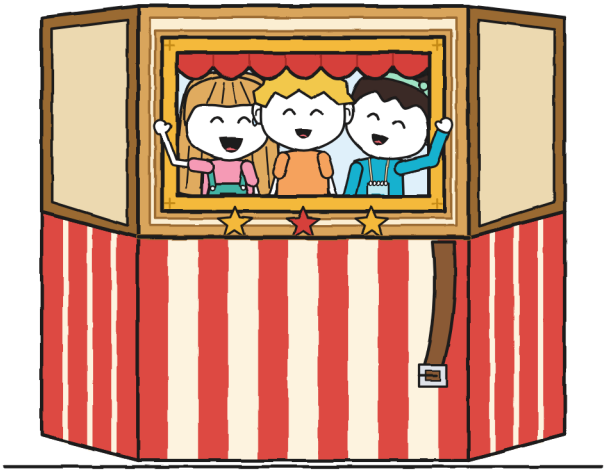
おはなしの なかだけ

この はんこは、おはなしの なかだけで おきる ことの しるし：ほんとうの ドラゴンは いないし、にもつは とんで もどって こない。ほんとうに はこぶ ときは、さいごの ページを 見てね。 —J.

ありえない はいたつ・6

ばしょは さんにんぶん

LinguAula



（グニの ノート）

サイズ **XL**・イラスト小説・13+

ありえない はいたつ・6
ばしょは さんにんぶん

シリーズの6さつめ。これまでの本は「このにもつはかみつく」「かみなりまえにあけるな」「へんそう、おねがいします」「ここじゃダメ、パンくず！」「ふたりでひとつのケーキ」。

文と絵：LinguAula

日本語版：LinguAula

サイズ XL・イラスト小説・13+

しょはん：2026

© 2026 LinguAula · info@linguaula.com

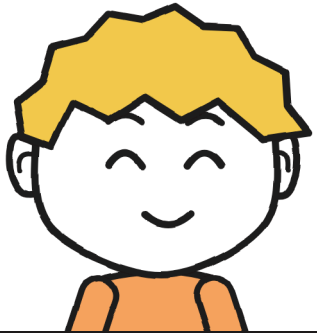
自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

フォント：Zen Maru Gothic、Yomogi、Zen Kurenaido、Andika、Patrick Hand、Caveat、Courier Prime（SIL OFLライセンス）。

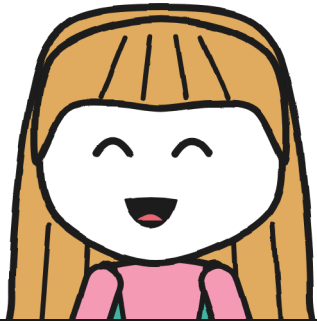
linguaula.comでしょうごとにれんしゅう

3にんで はこぶ。とっては きめた。 —J.

だれが だれ？



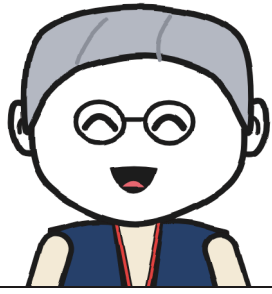
グニ。センチで はかる。こんしゅうは、ほかの こども かぞえる。



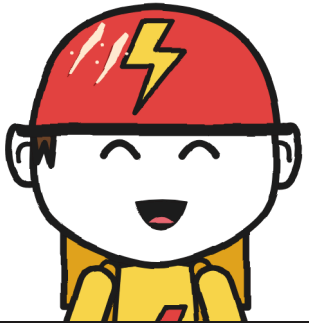
フリータ。みちは しっている。せつめいは、べつの はなし。



ノア。フリータの むかしからの ともだち。ほで はかる。ほは いつも みに つけて いる。



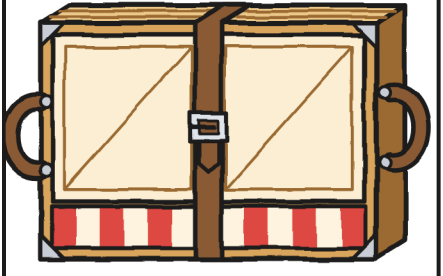
イレーネさん。げきの こうぼうを して いる。どっちへ、とは いわない。「とまれ」と いう。



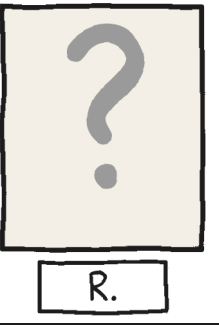
トニョ。イナズマびんと、みせの ひと。じかんを はかるだけで、いけんは いわない。ほとんどね。



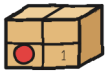
マラさん。にもつは かす。はこは はなさない。



6ばん。はこに はいる ぶたい。ベルトを だれも おさえないと、すきな ところで ひらく。



R.は さしだしひと。こんかいは、びひんリストに 1ぎょう のこした。



第 1 章

どうして 3にん ひつようなの？

ノート5は、ふたつの針が文字ばんに乗ったところで終わった。ぼくはそのまま閉じた。どちらの針にも「どいて」とは言わなかった。終わったノートは、終わったままにしておくものだ。それがいいところで、もう、だれにも言い争えない。

6番はオレンジ色だ。みかんのオレンジ。急いでいなければ、ひとつながりにむけるやつ。すみには、店のはんこもおしてある。マラさんはそれをカウンターに置いた。ピンクのノートのとなりに。それから、もう片づいている箱を片づけに、奥の部屋へ行った。マラさんはノートをわたさない。見る場所に、置いておく。

最初のページには、ぼくなりの決まりがある。2番には「公式」、3番には「ひみつ」、4番には「決定版」、5番には「しずか」と書いた。かぎのかかった言葉が4つ。その4つとも、ぼ

くより先にフリータが読んだ。今回は、それをわかっている言葉をさがした。

いちばん上に「グニのはいたつノート6」と書いた。ノートには、そう書くものだ。その下に、たった一つの言葉：

シェア。

そして、ページの半分をあけておいた。念のために。何の念のためかは、わからなかった。でも、すぐにわかった：1分もあいていなかったのだ。

フリータはカウンターのむこう側にいた。ノートを見せてとは言わなかった。指一本でひっぱって、みどりのペンのふたを取って、あいている半分に書きはじめた。字が大きすぎて、はしまで行ってしまい、ちょっと考えて、はしの外にまで書いた。それから「わたしじゃないよ」という顔をして、ペンにふたをした。この店では、もうだれの顔でもある顔だ。

1ページ目は、わたしの字でシェアした。 —J.

どれだけ使ったか、はかってみた：下の半分、ぜんぶ。ぼくの言葉は、まわりにあけておいた空気ごと、上の半分を使っていた。ふたつの半分。とてもまともな分けかただと思った。

いつものことだけど、ほかのノートを読んでいない人のために書いておく。店の名前は「ありえない はいたつ」。店主はマラさん。魔女(まじょ)で、むらさき色の帽子(ぼうし)をかぶっていて、はんこをおすと、火を消したろうそくのにおいがする火花が飛ぶ。左の棚(たな)には「もどってきた荷物」をしまっている。だれにもとどけられなかった荷物で、送り主はぜんぶR.だ。受けとった人が消えないインクでラベルにサインしないと、夜明けに、荷物は飛んで棚(たな)にもどってしまう。はじめは20こあった。フリータとぼくは、これまでに5つをとどけた：ドラゴンのたまご、足の生えたたね、ベル、「とうちゃく」ひとそろい、それにエリアさんのパン屋の台。かべには、みどりの字で「のこり15」と書いてある。イナズマ便のトニョは、ふせた箱の上に、いすの横に、自分の場所を持っている。いまのところは。

月曜日、エリアさんのメモの次の日、ぼくは学校から店にまっすぐ行った。フリータがカウンターで、ふうとうを一つ持ってまっていた。ぼくの知っているふうとうの色、みどりでも青でもなかった。ターコイズ色で、まだとじたままだった。指二本で、すみをつまんでいた。やけどしそうな持ちかただった。

「郵便やさんが持ってきたの。『ありえない はいたつ』あてだって。しばらくあけてない」

「どのくらい？」

「28分だぜ」と、トニョが自分の箱から、時計を見ながら言った。「この町の記録だ」

店の中でも、ヘルメットをかぶっていた。ヘルメットには、つめのひっかきあとが二本ある。時計は、そでをまくる時間がおしいので、そでの外側につけている。

ぼくはフリータを知っている。とじたふうとうがフリータの手の中にあるのは、そのふたを見つけるまでのあいだだけだ。28分は、がまん強さじゃない。何か別のものだった。何かは、わからなかった。

わたしのじゃなかった。わたしのじゃないふうとうは、3ばい重い。 —J.

マラさんはつめで開けた。紙をひつようより多くやぶらなかった。中の手紙は、はっきりした大人の字で、行のおわりがまがらない字だった：

「わたしはイレーネ、地域センターの演劇工房の担当です。びひんリストを更新していて、1行見つけました：『おりたたみのミニぶたい：うけとりまち』。そちらにありますか？31日の土曜日は、町のラリーです。ミニぶたいがたたんだまま、うちの中庭にとどいたら、3人のチームがはこんできた場合、その場でサインします。ノアのチームには3人分の場所があって、いまはノアだけです」

その下に、べつの字で、小さくまっすぐに、ターコイズで：

「フリータ、わたしだよ！ いま、演劇をやっているの。荷物に詳しいだれかを連れてきて。ーノア」

フリータは名前を読んで、口の片はしだけが上がった。かたほうだけ。話すつもりのないことを思い出したときのように。「ノア」と、小さく言った。何回も通った道の名前を言うみたいに。

「荷物に詳しいだれか」。それはぼくだ。「荷物」の方は気に入った。「だれか」の方は、あまり。



5時に、ふたりが来た。

イレーネさんは、ファイルをかかえ、ポケットだらけの紺色のベストを着て、首からホイッスルをさげていた。短い灰色のかみに、丸いめがね。そのめがねで、店の棚をひとつひとつ見ていった。頼まれてもいないのに、棚卸しをする人みたいに。ノアは、ひもでメモ帳をぶらさげて、耳のうしろにターコイズ色のえんぴつをさしていた。かみは、高い位置のおだんごで、くるくるしたカールを、ミントグリーンのスカーフでとめている。セーターはターコイズ色で、ふうとうと同じ。何もかも、さがさなくていいように、おくべき場所にあるみたいだった。

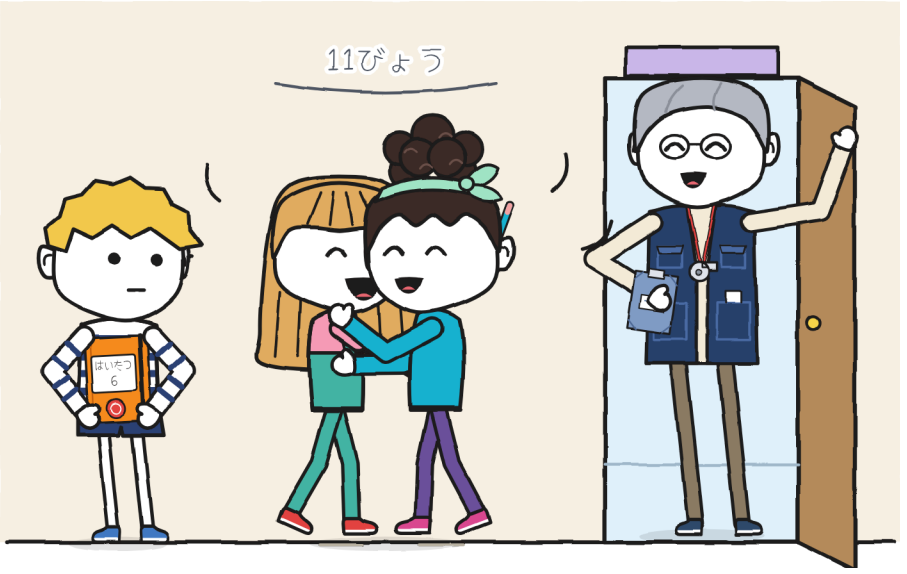
フリータはカウンターの戸を開けずに、下をくぐって出て、ふたりはだきあった。だきあっている時間は、はかる時間があるほど長かった：11秒。ぼくは横に立って、ノートを持っていた。ノートにはこういう役目もある。手に持つものを、くれることだ。

「この子がグニ」とフリータが言った。「荷物に詳しいの」

「はじめまして、荷物に詳しいグニ」とノアは言って、ぼくの名前をメモ帳に書いた。

名前を書いた。ついさっきつけられた、ぼくの「荷物に詳しい」という名字もいっしょに。立っている場所から、ぼくが

ページの2行目なのが見えた。1行目は「フリータ」で、下に線が引いてあった。もうすんだことみたいに。



マラさんは青いいすに乗って、棚から6番をおろした。ほかと同じ箱。大きくも小さくもない。ラベルはタイプライターで5行：6番。中庭の工房。ふたつのドアから入る。たたんでわたす。そして下に、いつもの、さしだしひと：R.まわりには、「へんそう」のはんこが9つ。

「はんこが9つ」とフリータは言った。

「『ふたつのドア』」とノアは読んだ。「ふたつのドアって？」

イレーネさんは知らなかった。マラさんも。ぼくは、はてなマークをつけてメモした。わからないことがあって、気がついたことだけは残しておきたいときに、ぼくがすることだ。

「9回持っていったわ」とマラさんは言った。「月曜日はさいほうのグループが開けてくれた。水曜日はコーラス。金曜日はチェス。『工房？ ここじゃないよ』って。工房あてのサインは、だれもしてくれなかったの」

話を聞きながら、3つのこまにかいた：箱をかかえたマラさんが、いつも同じドアの前に立っている。ドアの中には、順番に、糸の通った針、音符、チェスの馬。馬はなにも言わない。チェスは黙ってするものだから。その下には、夜明けの店のまどから、箱が入ってくるところ。9回。

「演劇は中庭で練習しています」とイレーネさんは言った。「そして、中庭にはベルがありません」

ファイルを開いて、マラさんにセンターのはんこのついた紙を見せた。マラさんは、鼻をぐっと近づけて読んだ。本気で受けとめるつもりのことを読むときの、マラさんの読みかただ。

「いま、工房はとうろくされています：『演劇の工房。担当：イレーネ』。工房あてには、もうサインする人がいま

す」

「サインする人がいるなら、どうしてマラさんが箱に入れて、エリアさんの台みたいに運ばないの？」とフリータが聞いた。

「箱に入れて、もう9回運んだわ」とマラさんは言った。「これからは、受け取る人が条件を決めるの」

「おりたたみのミニぶたいは、広場へ持っていくものです」とイレーネさんは言った。「子どもたちが町の道を運べるか、たしかめなければ。運べないなら、わたしには役に立ちません。役に立たないものには、サインしません」

「それ、もうパン屋さんで聞いたわ」とマラさんは言った。

手紙を読んでからずっと、聞きたいことがあった。なくなってしまう前に聞いた。

「どうして、3人いるの？」

本当に聞いたのだ。ふたつの取っ手のついたつつみ。ひとつの取っ手にひとり、ふたり。指をおって数えて、2になった。

だれも笑わなかった。イレーネさんは、めがねの上からぼくを見た。思っていたよりうまくはまる部品を見るときの目だった。

「いい質問。火曜日に、中庭で、あなたたちが答えてください」

マラさんは本を開いて、自分の条件を書いた。マラさんの条件は、いつも片手におさまる。自分の手で数えたら、親指がのこった：

- 6番：れんしゅうのためにかしだし。
- イレーネさんか、わたしといっしょに出る。
- たたんでもどる。
- ここでねる。

ラベルは箱につけたまま。箱はマラさんのところ。

棚でねていれば、夜明けにもどる場所がない。はんこは9つのまま。聞いてみた。 —J.



火曜日、センターの中庭に行った。歩道から、さびた鉄の門を通って入る。何重にもペンキをぬった門で、ひとりでにしま

る：はなすと、ゆっくりもどって、カチッと音がする。いいつけられないのにすわる犬みたいに。

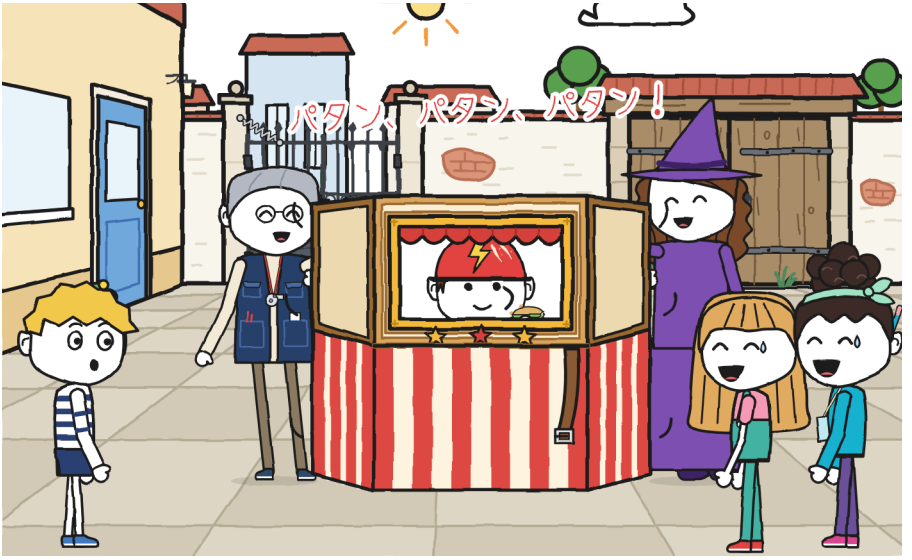
マラさんは箱を地面に置いて、ふたをはずした。出てくると、ミニぶたいは大きくなった。エリアさんの台みたいに。ぼくはもうおどろかない：メジャーを出す。

とじたミニぶたいは、木の板と布(ぬの)の、平たいつつみだった。両がわに取っ手がひとつずつ、バックルの3つの穴(あな)を通るベルトがついている。1メートルかける70センチで、横にすると、手のはばくらい。門は、とびらを開けて、90センチ。横にすれば、門を通る。そこまではかんたんだった。

何よりもまず、イレーネさんは、ミニぶたいがちゃんと全部あるかを見たがった。ベルトをはずして、つつみを回した。板が、自分の重さでひとりでに開いた。ひとつ、またひとつ：カチッ、カチッ、カチッ。3つのかべのある舞台(ぶたい)に、短いカーテンと、おくの板には、わくのついた窓(まど)。

窓(まど)からは、歩道を通りかかるトニョが見えた。サンドイッチを食べていた。口がいっぱいで、あいさつできなかった。一瞬(いっしゅん)、そこで止まった。わくの中で、ヘルメットをかぶって、

ほっぺたが片方(かた)だけふくらんでいる。おひるごはんの時間にかかれた、えらい人の肖像画(しょうぞうが)みたいだった。



「ぜんぶあるわね」とイレーネさんは言った。「工房(こうぼう)のきまり：手は取っ手に。ちょうつがいには、ぜったいに。曲がるときは、だれかがベルトをおさえる」

ぼくは、そのとおりにメモした。

イレーネさんとマラさんは、それをたたんで、ベルトをとめた。

「わたしたちでためす」とフリータが言った。ノアはもう、もう一つの取っ手に手をかけていた。

ふたりは、目を合わせて決めたりしなかった。声に出しても言わなかった。それぞれが、いつもの席に行くみたいに、自分のがわに行った。

3まで数えて、持ちあげた。持てた。中庭を1周した。ひじを少し開いて、ゆっくりと。ミニぶたいはふたりのあいだで、ゆれもしなかった。うまく運ばれるおぼんのように。門のところについた。門はしまっていた。

フリータは門を見た。ノアも見た。手はぜんぶで4つ。その4つとも、ふさがっていた。

ぼくは2メートルはなれたところで、手があいていて、ノートを持っていた。

イレーネさんは、おくで、ファイルをむねにあてて、何も言わなかった。「助けてあげて」とも、「あなたが」とも。

ぼくは背中(せなか)で門をおさえた。ふたりは通った。イレーネさんは、ファイルになにか書いた。



その日の午後、ぼくはこのノートの装置(そうち)を発明した。ぼくの道のりで5つめ、ふるえメーター、赤メーター、ここメーター、

さわぎメーターのつぎで、ひとりじゃなくて何人かをいっぺんにはかる、はじめてのだ。名前は「3にんメーター」、「区間ごとに、だれがなにをする」。区間ごとに1行、そして3つのマス。マスにはそれぞれ小さな絵：

- もつ：ふたつの手で、ふたつの取っ手。
- あんない：どこを、いつ、と言う。
- みちあけ：ドア、ふちいし、人。

1行目、「中庭、1回目」に、「フリータとノア」、「フリータとノア」、そして空のマス。2行目、「中庭、2回目」は同じで、3つ目のマスには「グニ」と書いた。

同じ名前が2つと、からのマスが1つ：通れない。マスがうまっていれば、通れる。イレーネさんへの答えは、もうできた。しかも、ぼくのだ。

そして、もう一つ、もっと小さなことをメモした：「門は、石でもおさえられる」

えんぴつを、ほとんど力を入れずにして書いた。



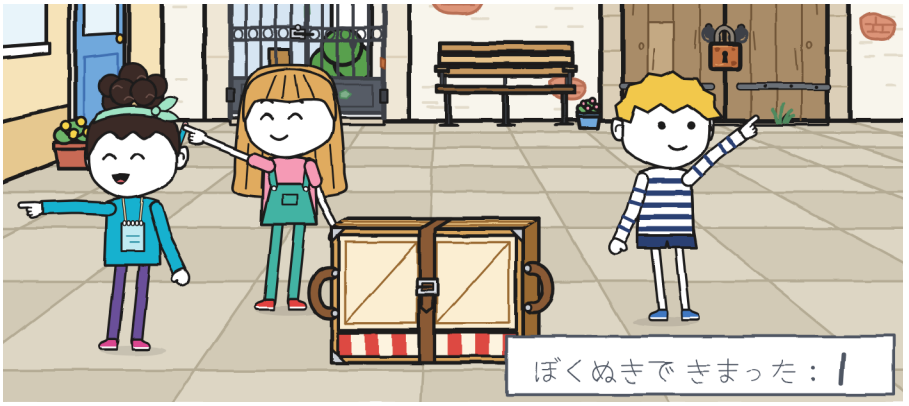
ラベルの意味が、まだわからなかった。

「『ふたつのドア』って、門の2枚のとびらのことだよ」とフリータが言った。

「どっちも開けなきゃ」とノアが言った。

「先にへいの外側をはかれるよ」とぼくは言った。

3人でいっせいにさした。フリータは門。ノアは工房の部屋。ぼくは道。



「あとで」とふたりは言った。

ふたり同時に、おなじ調子で言った。練習したみたいに。練習したんだと思う。何年も。

ぼくはひとりで行った。門を出ると、うしろでカチッと門がしまった。へいにそって、メジャーではかりながら一周した。区間ごとに、ひざの上にノートをのせて、数字をひとつずつ書

きながら。へいは長くて、水のにおいのする路地に面していた。そして、その角を曲がったところで、ぼくはなにかを見つけた。

急いでもどった。頭の中にそれを持ったまま、巻いていないメジャーを引きずって、歩道に1メートルの黄色をたらしながら。入っていくと、フリータとノアは、ぼくがこの町に来る前のできごとで笑っていた。声を立てずに、かたで笑って、ノアはフリータの腕にさわって止めようとして、フリータは止まらなかった。

ぼくは口を開けた。

「もう決まったよ、グニ」とフリータが言った。「2枚のとびらだよ」

ページの下のすみに、小さく、えんぴつで書いた：ぼくぬきで きまった。そしてよこに、ぼうせんを1本。口は開いたままで書いた。

口をとじた。ノートも、とじた。

そのぼうせんを見たのは、2日あとだった。わたしの分だった。 —J.

ひとつの おはなし、六つの サイズ

この本には六つのサイズがある。3さいから16さいまでで、ことばは20いじょう。XXS、XS、S、M、Lは同じ絵で、物語を一ページずつ語り、サイズが上がるごとに、細かいところまで話すようになる。XLは小説だ。同じ物語に、グニが心の中で考えても口には出さないことのための場所がある。

CEFRのレベルは目安です。XXS：pre-A1・XS：A1・S：A2・M：B1・L：B2・XL：B2–C1。

それぞれのサイズで。おなじミニぶたい。 —J.

かぞくと せんせいへ

linguaula.comでしょうごとにれんしゅう（Lサイズの練習問題つき）